



酒瀬川 晃二 さん(74)

昭和47年4月から昭和53年3月までの6年間担当。思い出の写真は、珍しく港にズラリと並んだ漁船をスケッチする小学生。

私

が担当していた頃は、高度成長の時代で、市民会館や准看学校などのいろんな建物が建てられて、漁港・畑かん・下水道の3大プロジェクトに取り組んだ時代でした。金山小学校にプールが新設されて、子どもたちが服を着たまの校長先生をプールに投げ込んだことがあったんです。その写真を表紙にしたことはよく覚えていません。そしてその時に、当時の南日本新聞枕崎支局長が、水泳の国体選手だったこともあって子どもたちに泳ぎの指導をしていましたね。

デジカメもパソコンもない時代で、原稿用紙を広げて文章を書いて、見出しを付けて、レイアウトをしてという作業を手書きで行っていました。昔は市立図書館の近くに印刷会社があって、そこに原稿を持って行っていました。その

印刷会社には当時の川辺町と坊津町の広報担当者も来ていて、広報紙についてよく議論をしていました。また、川辺地区と日置地区と合同で研修をしていて、その頃一緒に来た人たちは今も付き合いがあります。その出会いがいちばんの思い出ですね。

市民が主役の広報紙。多くの市民に読まれる広報紙にするにはどうしたらいいのかというのを常に悩んでいます。市民を1人でも多く登場させるためにアンテナを張っていましたね。写真を撮る時も、いい表情を撮れるように気を付けていたのですが、これがなかなか難しいものでした。

元担当者だったのもあるのですが、今の広報紙も一字一句欠かさず見るようにしています。これからも読みやすい広報紙を期待しています。

歴代の広報マンにインタビュー



榮村 道博 さん(67)

昭和53年4月から昭和56年3月までの3年間担当。思い出の1冊は、昭和54年9月号。市制30周年を振り返るさまざまな企画が掲載されている。

枕

崎市は代々広報紙のレベルが高かったです。先輩方はいつも県の広報コンクールで上位に入っていました。そういう先輩方の後に担当をするっていうのは本当にプレッシャーでした。広報紙は文章と写真です。文章は中学生でも理解できるように分かりやすく書きなさいということをやや言われていました。でも私にはそれが難しくて。担当になった頃は本当に苦労しました。新聞のコラムがいちばんの手本だと聞いて、とにかく読んで勉強しました。

昭和54年が市制30周年の年で、記念号を作ったんですけど、当時は写真とか資料があまり残っていないので、県立図書館まで行って調べて、写真を集めてなんとか作り上げました。年表を作ったり、片平山公園で座談会もしました。苦労した分、思い入れのある

号となりました。今はデジタルカメラで、たくさん写真を撮れるわけですが、昔はフィルムで、現像するまでどんな写真が撮れているか分からない。失敗も多かったけど、その中でよく撮れていた1枚があると本当にうれしいものでした。写真を自分のイメージするとおりの仕上がりにするために、現像・焼き付け・引き伸ばしを自分でしていました。自宅の2階を暗室にして、道具も揃えて。昔は白黒写真で、ただ単純に現像すればいいというものではなくて、微妙な調整も必要で白と黒だけで表現するって難しいものでした。

広報には「記録」の意味合いもあるんです。枕崎市政の変わり目を丁寧に取材して欲しいです。そして、楽しく役に立つ広報紙を作っているってほしいと思います。



企画調整課企画調整係 中嶋 章浩 主幹兼係長(49)

平成8年7月から平成15年3月までの6年9カ月間担当。思い出の1冊は、平成11年12月の500号。この年は市制50周年の年でもあった。

担

当になったばかりの頃は、まだ手書きでの作成でした。でも効率が悪かったので、思い切って上司にパソコンを使って紙面づくりをするDTP(デスクトップ・パブリッシング)の導入を相談しました。先に導入した近隣の町を視察に行つて、「すぐにやろう」ということになりました。とにかく進化をさせたくて、毎月のように広報紙を少しずつ変えていきました。

最初の頃は、文書校正で上司から返ってきた原稿は、赤鉛筆で書かれた訂正で真っ赤でした。文章は苦手でした。そういうこともあって、読んでもらう事ももちろん大事だけど、まず見てもらう事だと思ふようになりました。カラーにもしたかった。全面カラーは実現できなかったけど、表紙のカラー化は実現しました。広報紙の顔である表紙に

は特にこだわったつもりでした。表紙写真にはとにかく子どもを載せたかったです。1人でも多く。取材依頼があった時は、よほどのことがない限り必ず行っていました。取材に行く先々で色んな人に出会って、幅が出来たというか。全ての取材に思い出があります。

6年9カ月広報担当としてやってきて、朝までかかって原稿を作ったりしたこともありましたし、つらいこともたくさんありましたけど、異動で離れたときは寂しいものがありましたね。

広報紙は市民の立場に立つことと行政情報との掲載バランスが重要。行政色の強いものはなかなか読んでもらえません。いかに読んでもらうかを考えながら、時代に合った広報紙作りをしていってほしいと思います。

枕崎市の広報紙を支えてきた

4

年間の中でいちばん印象に残っている号



平成24年8月号

は、全国広報コンクールで入選した、平成24年8月号。特集の「鯉節新時代」では、私と同じ世代の鯉節づくりを頑張っている人たちが、伝統を守りながらも新しい時代に対応するため、どのように考え、行動しているのを感じながらの取材でした。広報紙には、頑張っている市民の姿をどんどん取り上げるようにしていました。とにかくいいものを作りたい、読んでもらいたいという一心でした。苦労は尽きませんでしたが、全国広報コンクールでの入賞は最高のご褒美となりました。

写真を撮る上で特に気を付けていたことは、その人がいちばん生き生きしている瞬間を撮ること。写真1枚で背景

にあるストーリーを感じられる写真を撮ることを目指していました。いい表情や感動的な瞬間を伝えるために、オリジナルカラー化をどうしても実現したかった。広報紙は、まずは見たいと思ってもらう事が大事だと思うので、視覚に効果的に訴えるという意味でもオリジナルカラー化できたことで、表現の幅が広がったと思います。

時代はどんどん変わっていき、情報発信のツールも増えていきます。これからはそれらの活用も必要でしょう。近々、ホームページもリニューアルされるようなので、広報紙と市ホームページとの連動にも期待しています。紙媒体も必要ですが、忙しい人や若い人たちがいつでもどこでも手軽に必要な情報を得られる状況を作っていくことが、今の時代に必要なことだと思います。



水産商工課商工振興係 桑原 英樹 主任(37)

平成21年4月から平成25年3月までの4年間担当。思い出の写真は、平成23年9月号の表紙。三尺玉花火の火柱は命がけて撮った1枚。

読者の一声



花岡 トミさん(87)

私は平成元年から枕崎市に住んでいます。活字が好きで新聞も毎日読みますし、広報紙も毎月読んでいます。広報紙を読めば、さまざまな市の情報を知ることができますから。紙面は全ページがカラーで、とても見やすいです。最近では料理のコーナーが楽しみです。簡単に作れそうなものがあると、参考にして自分でも作ったりしていま

す。要望ですが、広報紙の題字の「枕崎」の文字は、毎月子どもたちが書いたものだけど、時には大人が書いてもいいのではないのでしょうか。漢字だけではなく、たまにはひらがながあってほしいと思います。これからは引き続き広報紙を読みたいと思っています。もっと中身を充実して、読みやすい広報紙をお願いしたいです。

読者の一声



松野下 富士郎さん(65)

が、内容的な部分で言えば、行政記事で数字的な部分が細かくて逆に分かりにくいと思うことがあります。細かい数字も大事だと思うのですが、大きなくくりでも理解できるような表現があるといいなと思います。今もいろいろ掲載されていますが、枕崎市民が知らない情報がまだまだあると思うので、もっと掘り起こして知らせてほしいと思います。

私は音訳ボランティアをしていますので、障害者の方の目線という意識を持ちながら広報紙を読んでいます。利用者からはCD 1枚分に収めて欲しいという要望を受けているので、全てを吹き込むことはできなくて、内容を取捨選択しながら吹き込みをしています。広報誌全体としては行政記事があって、トピックスがあって、バランスはいいと思うのです